

若い知性・理性に 大きな可能性 ～世代の断絶 若者批判に流されるのは危険～

新妻義輔（元朝日新聞大阪本社編集局長）

若年層で自民党支持が多いのが、ずっと気になっています。初めて「本当？」と驚いたのは、2016年7月の参院選沖縄選挙区の出口調査。オール沖縄の無所属新人で、元宜野湾市長の伊波洋一氏(61)が35万6355票を獲得、自民党公認で公明、維新推薦の沖縄担当大臣を務めていた現職の島尻安伊子氏(51)に10万6400票の大差で勝ちました。ところが、出口調査で、20代だけでは島尻氏が上回ったのです。全国的にも、若年層が与党・自公に投票し、年代が上がるにつれ野党の割合が増える傾向でした。世代の断絶を突き付けられた思いでした。

大人は「若者は無防備で認識不足だ」と批判。一方、何かにつけて不安がいっぱいの若い世代は、「わかっていない」と大人に反発。懐疑的な大人たちと純真と不安が常に背中合わせの若者との間に深い溝が刻みつけられ、分断が生じています。「ファシズムは若者を好む」といわれますが、安倍政権がこれを意識したうえで仕掛けてきているとすれば、恐ろしい。若者批判に流されることこそ、危険です。

大阪南部の私立高校3年生のクラスで、2017年10月22日の総選挙直前に「模擬投票」を実施しました。この結果・報告をみると、「憲法9条改正」「原発」「消費税」「教育の無償化」「北朝鮮問題」「景気回復」「働き方改革」・・・政治への関心も高く、社会に対する問題意識も持っており、みずみずしい知性・理性に働きかければ、「健全な目」が育つ条件と可能性は大いにあることがわかります。

その一つが模擬投票の結果。「自民26%+公明4%+希望の党0%+維新の会17%」（与党と補完勢力）47%。「立憲民主党17%+共産党17%+社民党4%」（野党）38%。白票13%——現代日本の得票構造をほぼ反映しており、生徒たちのなかに素直な政治意識・感性が育っているのがわかります。

実際の選挙での投票率の低さについては、「自民党以外の政党はゴジャゴジャしてよくわからない。自分もここに入りたいというところがなかった」。1993年以前にあった政党で、20余年後も一貫して存在し続けた政党は自民党と共産党だけ。新しい政党が現れては消えていく時代が続いています。若年層では、「保守」「リベラル」の区分が希薄になっています。若い世代ほど自民党しか知らない。自民党が若年層に強い理由が浮び上がってきます。

若い世代にどう向き合い、草の根の行動力をどう広げ深めていくか。これが、日本の政治を動かし、社会の未来を変える重要なカギになります。

他の人と理解し合う心構えは——（1）時間をかけて、よく聞くことから信頼関係は生まれる（2）引っ張っていくリーダーではなく、自分のやり方や思いを相手に伝えて、いつの間にか周囲の人たちを巻き込んでいく。上から「こうしてください」というのではなく、「みんなでこうしていきましょう」と輪を広げていく。最も効果があるのは、「半径5メートルの対話」（3）絶望のど真中で希望は生まれる。転んだら立てばいい。あきらめなければ敗北はない。

（当会常任世話人）